

第8分科会

国際理解教育

研究課題

自他の文化を理解し、共に生きる子どもの育成を  
目指す国際理解教育と校長の在り方

研究発表

「豊かな表現力と積極的な  
コミュニケーション能力の育成を図る教育の推進」

京都府

夜久野町立精華小学校

端野学

## 趣 旨

国際化、情報化、科学技術が一層進展する変化の激しい時代の中で、21世紀を生きぬく子どもたちには、「時代を超えて変わらない価値あるもの」を大切にしつつ、「時代と共に変化するもの」に的確に且つ迅速に対応していく必要がある。

特に国際化社会においては、歴史的背景や政治・文化の異なる人間が相互依存しながら共生しており、このような社会を生き抜くためには地球市民としての立場で考えたり、判断したりすることが必要になってくる。

また、国際化社会を主体的・創造的に生き抜くために、国際的共通語となっている英語でのコミュニケーション能力を身につけることにより、国際理解に関する豊かな感性や意識を芽生えさせることが重要である。

そこで本校は主体的に生きる日本人としての基礎的資質を養うために、人権尊重を基盤として、我が国の文化と伝統を尊重するとともに、諸外国の文化や伝統を理解し尊重する態度を育てる取組を進めている。

取組は国際理解教育を関連的・発展的に取り扱った総合的な学習の時間の研究を進め、中でも AET や小中連携加配教員等とのチームティーチングを行う英語活動や、多くの外国の人々との交流体験をしながら、今まで気づかなかったことに目を向けたり、広い視野で物事を考えたりする経験をさせ、積極的なコミュニケーション能力を身につけた児童を育てるとともに、研究推進を深める事による学校の活性化や人材育成の方向について究明したい。

## 研究の概要

### 1 夜久野町並びに本校の概要

日本中央標準時を示す東経135度線（子午線）が通る緑豊かな大地と、すがすがしい空気に満ちあふれた自然環境、人と自然と文化にふれあえる夜久野町は、京都府北部

に位置する農林業を基幹産業とした人口約5000人の町である。

特に近年は少子高齢化が進み、過疎化は大きな課題であるが、教育に対する地域社会の関心は非常に高い。特に国際化、情報化の進展が著しい社会状況にあっては、夜久野町としての施策も講じられ、今後の社会を生き抜くための基礎を培うことは、地域社会、保護者の強い願いであり、それゆえ教育に対する期待もまた大きい。

本校は7学級、児童数86名の小規模校である。校区は素朴で温かな中に進取自立の気風があり、農作業を中心とする村おこしの努力や学校教育振興への関心は高く熱心である。

また、児童達は温和で純朴であるが、児童数の激減により、地域での集団的な遊びも少なく、積極性や自主性に欠ける面が見られる。今後の激しい社会の変化に対応しながら、主体的に生きていくために必要な力をしっかりつけなければならない。

そこで、国際理解教育の学習を通してふるさとの文化や伝統を理解しながら、様々な国の人々との心ふれあう交流や英語活動により、外国の文化にも親しみをもち、外国の人々とも積極的にコミュニケーションを図り、共に生きようとする児童の育成を目指した研究を進めている。

研究を始めて以後、自然に異文化を受け入れ、素直に外国の人々と接するようになった児童の姿も見られ、この変容を一層確かなものにするるとともに、外国の人々と積極的にコミュニケーションを図れるための指導方法の工夫・改善、自国の文化についての理解、異文化を尊重する態度や世界の人々とともに生きようとする資質と態度を育てるための学校経営・運営の在り方を考えたい。

夜久野町の施策として AET,GET,小中連携加配教員の配置がされ、英語活動や交流体験活動が計画的に実施できる状況が整えられており、小中連携教育の推進において、いかに教育効果を発揮するかということ念頭に置きながら研究を進めている。

## 2 方針

### (1) 学校教育目標

- 「進んで学び、よく考える児童」の育成
- 「健康で、活気に満ちた児童」の育成
- 「豊かな感性を持ち、自然や生き物を愛する児童」の育成
- 「励まし合い、協力し合う児童」の育成

### (2) 目指す学校の姿

- 登校しがいのある学校  
「先生が好き」「友だちが好き」「学校が楽しい」と児童が感ずる学校。
- 登校させがいのある学校  
「笑顔で子どもを送り出してくれる親や家庭が、信頼と誇りに思える学校」
- 仕事しがいのある学校  
「教育指導により、子どもの変容が見られる成就感に満ちた学校」

### (3) 学校経営

地域社会に開かれた学校経営の推進

「国際理解教育」をテーマとする総合的な学習の時間の研究推進

- ・ 先進的・実践的な研究を展開しながら、その研究実践を蓄積するとともに波及させる。

目指す児童像

- (ア) 身近な問題について自ら気づき、考え、行動しようとする児童

- (イ) 積極的なコミュニケーション能力を発揮する児童

目指す教師像

豊かな人間性、高い専門性、幅広い社会性を基盤とした実践的指導力を身につけた教職員を育成する。「元気な学校で元気な教師が育つ」ことを信じ、共通理解と協働の研究推進を進める。

## 3 本校の国際理解教育

### (1) 研究主題

「主体的・創造的に学ぶ 心豊かな児童の育成」  
ー心ふれあう国際理解教育をとおしてー

国際理解教育をテーマとする総合的な学習の時間を研究の重点とし、特に「英語活動」「交流体験活動」「単元学習活動」の三つの内容で進めている。

### (2) 三つの内容

英語活動（低学年 3 5 時間、中・高学年 5 0 時間）  
AET や小中連携加配とのチームティーチングによる指導体制の中、英語の音声を通じて楽しい歌やゲーム、簡単な会話の体験を展開することにより、諸外国の文化に親しみをもって、「積極的なコミュニケーション能力」の育成を目指す。

・低学年 Hello~ . Lets start English time.  
Good-bye everyone. Thank you.

Whats is this ? My name is ~  
What animals do you have ?

・中学年 Good moning ~ How are you ?

My name is ~ I like ~  
What sports do you like ?  
When is your birthday ?

・高学年 Where is it from ?

Where are you from ?  
Im from Yakuno in Japan.

交流体験活動（全学年 1 5 時間）

地域の人々や様々な国の人々との心ふれあう交流を通して、外国の文化にふれ、自分たちのもつ文化との違いに気づき、尊重する態度や異なる文化を理解しつつお互いのよさを理解し、ともに生きることを実感させる。

単元学習活動（中高学年 4 5 ~ 5 0 時間）

自らの課題設定や調べたり発表をしようとしたりする主体的学習の場を通して、学ぶことの楽しさや自分の思いを伝えることの難しさ、やり抜く成就感などを体験している。

### (3) 児童につけたい力

積極的なコミュニケーション能力を育て、国際理解を進めるためには、お互いの理解を深め合うことが最も大切なこととなる。

また、コミュニケーション能力を育てるためには、外国語の習得はもちろんであるが、相手に的確な表現で伝えようしたり、表情や態度等から相手の気持ちも読みとる事が大切な力である。

特に英語活動で育てたい力としては、「言いたいことや伝えたいことを見つけようとする。」「英語での表現方法や必要な言葉を知ろうとする。」「自分の知っている表現方法を使おうとする。」「AET や担任、辞書などの助けを借りて表現したいことを考える。」

また、教科における学習、特に国語科の指導と大きく関連し、伝え合う力や表現力を育てなければならない。

### (4) 特徴的な取組

交流体験活動（マレーシア、カナダ）

- ・ 交流することを通して、自然や環境、文化や生活様式など国の様子を知り、日本の文化や習慣との違いを知ったり体験したりさせた。
- ・ 絵や写真、視聴覚機器の活用による紹介もあるが実際に体を動かしたり、踊ったり、ゲームや歌、食事等を一緒にする交流が効果的である。
- ・ 異文化理解の方法として、交流をした外国の人物を通じた理解の仕方を大切にしたい。

(滞在期間、上手な日本語、苦労話等)

英語劇

- ・ 昨年度はクラブ活動の中で「歌・ダンスクラブ」を取り組んだが、今年は4年生と6年生が取組を始めた。(「オオカミと7匹の子ヤギ」「おむすびころりん」「シンデレラ姫」)
- ・ 「受け身の学習に非ず」学習した英語を活用して何かを創り出そうとする「創造的・意欲的」な学習活動を展開させる取組である。
- ・ 英語活動、異文化理解にとどまらない指導者自身の創造的な教育実践として評価した。  
ふるさと学習「精華探検隊」
- ・ 目的地を児童のアンケート結果を参考にして設定し、距離や内容、指導体制等の活動計画を練る。
- ・ 郷土の自然や文化にふれ、郷土を愛する心情を育てることをねらい、異年齢集団を活用したり、地域社会の指導者の支援を得ている。
- ・ 全校児童が校区の地域社会へ繰り出していく様子は、地域社会の注目の的となる。同時に学校教育の公開につなぐ効果がある。  
研究広報「ゆうゆう」とホームページ作成等
- ・ 学校教育の現状は予想以上に理解されていないのが現状であり、各種の手段を活用し一層の発信を必要とする。
- ・ 「ゆうゆう」には、年間の取組計画、特徴的な学校の取組や児童の様子、学校評価結果の紹介等を掲載した。
- ・ 学校・各学級のホームページ作成は、全教員が順番に校内研究会等の時間を活用し、日常的な学校の研究や児童の様子について、毎日こまめに更新をしている。だから保護者や地域社会の人々からも関心は強く、ホームページを参考に学校視察者も訪れている。
- ・ 地元新聞社への広報をこまめにすることで、学校の取組や行事、その成果等の報道記事が掲載される。地元はもちろん広い範囲に確実に啓発されるよさを活用している。

#### 4 校長の果たす役割

- (1) 具体的な学校の姿をイメージし、学校経営方針や状況を保護者・地域社会に示すことが必要であり、教育や経営を開くという観点から
  - ・ 「自らの思いを語る」：各種会議、懇談会
  - ・ 「住民の意見を聞く」：学校評議員、各種団体役員  
保護者の声
  - ・ 「地域の教育力を生かす」：指導者や講師としての三点を大切に考えている。
- (2) 「夜久野の教員」を育てる。

夜久野町には3小・1中学校、55名の教職員が勤務しているが、夜久野町出身者はわずか5名であり、大部分が近隣の市町からの転入となっている。

夜久野町立学校教員として夜久野町のことをしっかり知り「夜久野の教員」になりきらせる必要があることから、町教育研究会として町長を招き、夜久野町の経済・産業・文化や歴史について、さらには市町合併を前にした課題や構想について学習した。

このことを通して各教科等での指導や地域社会との連携学校配分の予算額等々、日常の教育活動を進める際に必要な地元夜久野町の実状を知ることができた。

- (3) 「多様化した教員」を「魅力ある教員」に育成する。  
本校は小規模校であるが、教員の年齢や性別はもちろん、個人の特性が多様化してきている。児童への指導過程における影響力や家庭・地域社会との連携における影響も大きい。

各教科・領域における指導法を基礎とし、さらには「人材の活用」「学校や教職員のニーズの把握」「問題や課題を見つけての解決策の提案」「アイデアの提供」等ができ、学校運営面に参画ができる人材を育成することが重要であると考えます。

過去には「千円会」と称する人材育成の会が組織されていたが、今年はIT教育をテーマとした「研究グループ」の組織化を図り自律的研修を進めている。

校長をを代表者として各種研修に派遣した中堅教員をリーダーとした研究グループを組織させ、町内の各学校から集まった教師が自分たちで検討した計画や内容を研修することで「企画する能力」や「実践的な能力」「評価する能力」等を身につけさせたい。(月に一回の定例会を開催)

#### 5 夜久野町立学校校長会の取組

- (1) 各学校の取組状況や課題等を出し合い、町の施策の効果的活用や教育効果の発揮方法について協議している。また、福天加小学校校長会での実践発表や課題提起を通じて、夜久野町の実践的な研究内容の波及を進めるための発信もしている。
- (2) 校長会、教頭会、教務主任会、教育研究会の研究部長とは欠くことのできない重要なラインである。校長会長、町研究会会長のリーダーシップの発揮も同様であり、その活動は施策・予算についての成果や課題を整理し、次への展望を明らかにすることで施策の継続や予算確保へとつなげることができる。また夜久野町教育推進上の原動力を確保する意味でも重要である。
- (3) 文部科学省指定の「人権教育総合推進地域事業」については2年次を迎え、これからの人権教育を見通し、現在の教育実践内容を入権の視点で整理しながら町内外の学校や地域社会すべてに広く学校公開をした。

- ・ 「教育を受けることそのものが人権である」としての「学力充実」「情報教育」「英語活動」
- ・ 「人権尊重と人権問題についての教育」として元ハンセン病患者との交流
- ・ 「人権が尊重された環境の中での教育」として、「全校児童のいいところ」の発表会、人権旬間の取組
- ・ 「人権のための教育」として、自ら「考え」「判断し」「行動でき」、お互いを尊重しあい、共に生きようとする国際理解教育の推進 等をきっかけにしながら、これまでの教育活動を人権の視点で見つめ直そうとしている。

## 6 学校評価

- (1) この評価については児童や保護者に学校評価に参加してもらい、「今のような成果が見えたか」「どのような課題があるか」などの評価を得て、学校の自己評価や自己点検を強化したいという思いから実施したものである。児童の評価は、今の英語活動について楽しく学習しており、高学年になるにつれて「挨拶」をしたり、「会話」や「スピーチ」をしたりすることでの喜びや楽しさを求めている。このことは研究主題の「積極的なコミュニケーション能力の育成」に合致した結果といえる。保護者の評価についても、私たち教師が意欲的な取組を進め、よい結果を生みだしていこうという希望をあふれさせてくれるような応援を得ている。
- (2) これまでの学校経営や運営・研究推進等についてのまとめや教職員の資質の向上を目指し学校公開を実施し、(7月に学校関係者と家庭・地域社会の全戸対象)同時に学校教育に対する評価を受けた。
- (3) 今後については、「評価の結果」と「評価に基づく改善」を伝え、結果を踏まえた改善である事を説明することで効果的な連携を深めたい。

### 【児童の声】

- (1) 英語活動は楽しい。(86名)  
【理由】「ゲームや歌を歌ったり出来る。」  
「体がほかほか温かくなる。」  
「英語が話せるのが楽しい。」「ダンスや踊りが楽しい。」  
「スピーチが楽しい。」「修学旅行での質問が楽しい。」
- (2) 英語活動でどんなことをしたいですか。  
「ゲーム、歌、外国の遊び」「挨拶、物作り、踊り」  
「会話、話」「交流、外国調べ、」「外国人との交流」

### 【保護者の声】

- (3) 英語活動についてどのようにお考えですか。  
「よい取組だ」(92名)  
【理由】「楽しみながら、自然に英語に親しめる。」  
「世界と友だちになるには、英語は不可欠」  
「小さいときから馴染んでおくことが必要」

- 「話せる英語が必要」
  - 「楽しい話を聞かせてくれる。どんどん続けてほしい。」
- (4) 交流体験活動についてご意見を聞かせてください。  
「異文化を知り、いろいろ体験してほしい。」  
「お年寄りとの交流もしてほしい。」  
「専門家や達人との交流をしてはどうか」
  - (5) お子さまをどのような人に育てたいですか。  
・ 善悪の判断・思いやり・挑戦する・活発な子  
・ 素直・積極的に・人のために働く・健康  
・ 世界平和に役立つ・信念をもつ・自己主張  
・ 世界に広い視野をもつ・人の痛みがわかる

## まとめ

### 1 成果

- (1) 国際理解教育の推進により、学校全体が活性化し、児童の学習成果が見えてくると同時に、教職員にも研究重点内容に関する自信が生まれた。  
外国の人々と積極的にコミュニケーションを図ろうとする児童が増え、ものおじしない態度が育ちつつある。  
英語活動を好きな学習や楽しい学習とする児童が増加しており、また高学年になるにつれて外国の人と「会話」「接触」「ふれあい」「交流」「メール」等をしたいという願いを持っている。  
英語活動の指導では、担任とAET,GET等とのチームティーチングによる授業形態が整い、担任とAETとの打ち合わせの上、授業は必ずチームティーチングで実施している。  
英語活動では、英会話の能力を伸ばすだけの時間ではなく、授業を通じて児童につけたい力を考えて展開する必要があり、授業展開に責任を持たねばならないのは担任であるとの共通理解をしている。
- (2) 本校の特色としての「国際理解教育」は、町内・校区の地域社会に浸透しつつあり、保護者からは英語活動や交流体験活動のよさについての評価を受けるようになった。  
本校英語活動に対して「よい取組」という保護者の意識は92パーセントに達し、「楽しい英語」「話せる英語」「世界のひとと友だちに」「今後の社会では必須」等の声が多い。  
又「国際理解教育」研究推進にあたり、他の学校からの視察や資料の提供依頼等があり、教職員の励みになるとともに、研究成果の波及へとつながった。
- (3) 主体的・積極的な研究実践を展開する「元気な学校に元気な人材が育つ」ことを改めて考えさせられた。